慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フィードバックが作文の改善過程に及ぼす効果：制御焦点とのATIに着目して
Sub Title	
Author	福富, 隆志(Fukutomi, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2017
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.84 (2017.) ,p.56- 59
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成29年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000084-0056

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フィードバックが作文の改善過程に及ぼす効果
―制御焦点とのATIに着目して―

福富隆志

1．問題と目的

学習者は，環境の中で様々な情報を認知し，自分なりに意味づけることで，学んでいく。特に教育実践においては，教師が児童・生徒の学習を促すために，意図的に情報を与えることも多いであろう。その中でも，教育評価の観点から重要なものとして，教師によるフィードバックを挙げることができる。

教育実践におけるフィードバック（以下，FB）は，「学習を促すために伝えられる，パフォーマンスや理解に関する情報」(Hattie & Timperlay, 2007）と定義される。FBは様々なかたちで与えられるが，特に，教師による意図的なFBの提供は，形成的評価（formative evaluation）の実践の1つとして，古くからその重要性が指摘されてきた。そこで本研究では，教師がFBを与える際の指針を示すために，誘意性（valence）に着目した検討を行う。これは，FBを，学習成果のポジティブな側面を伝える「肯定FB」と，ネガティブな側面を伝える「否定FB」に分類する次元のことを指す。

FBの誘意性に関する先行研究は，肯定FBと否定FBの効果を比較するものが多い。例えば，名取（2007）は，小学5, 6年生のサッカーの指導場面における言葉がけの効果を検討した。その結果，肯定的な言葉がけが否定的な言葉がけよりも意欲を高める一方で，否定的な言葉がけであっても，生徒がそこに教授的な理由を見出せば意欲が高まることが示された。

こうした研究には，主に2つの問題点がある。第一に，FBの生態学的妥当性の問題である。児童・生徒にFBを与える際に，学習成果のネガティブな側面だけを伝えることは多くはないであろう。したがって，肯定FBと否定FBの比較という枠組み自体を問い直す必要がある。第二に，パフォーマンスの改善過程に着目した研究が少ない点である。FBによるパフォーマンスの改善は，自己調整学習（self-regulated learning）を構成する主要な過程の1つである。したがって，こうした過程に着目する必要性は大きいであろう。

以上の問題点を解決するために，本研究では，否定FBの代わりに，ネガティブな側面の改善を促す「改善FB」と，ポジティブな側面を指摘しつつ改善を促す「両FB」を，肯定FBに加えて比較の対象とする。また，パフォーマンスの改善過程を，意図，方略，感情に着目して統合的に捉える。さらに，自己調整学習の枠組みでは，パフォーマンスの改善過程には，学習者の適性による差が生じると考えられている。したがって，本研究では，適性処遇交互作用（aptitude treatment interaction; ATI）にも着目する。

一般的なATIの研究で取り上げられる適性は，教授方法と関連して教授の結果に影響を及ぼしうるものすべてが含まれるが，パフォーマンスの改善過程の差を捉えるためには，より方略使用に特化した適性とのATIを検討する必要があると思われる。したがって，本研究では，適性として制御焦点（regulatory focus; Higgins, 1997）を取り上げる。制御焦点とは，自己調整における注意の差であり，進歩に注意が向けられる促進焦点と，後退回避に注意が向けられる予防焦点という2つの状態が想定されている。さらに，これら2つの状態は，課題の遂行方略の差に影響することが示されている（Förster, Higgins, & Bianco, 2003，など）。したがって，FBによる改善過程の差にも，こうした適性が反映されると

考えられる。

本研究の目的は，FBの誘意性が課題パフォーマンスの改善過程に及ぼす影響を，適性としての制御焦点（以下，制御焦点適性）とのATIを含めて検討することである。本研究の仮説は，両FBの提供が最も作文の改善を促すこと（仮説1），および両FBが提供される条件において，予防焦点になる傾向の高い人ほど熟慮的な方略を用いて作文を改善し，促進焦点になる傾向の高い人ほど直感的な方略を用いて作文を改善すること（仮説2）である。仮説1の根拠は，両FBのうち，ネガティブな側面を指摘して改善を促す部分が，学習者に改善のための情報を提供してメタ認知を機能させる一方で，ポジティブな側面の指摘が，有能感を生じさせて改善のための意図的な行動を生起させる（Deci, 1980）と考えられることである。仮説2の根拠は，先行研究によって，予防焦点の人は時間をかけて正確に課題を遂行し，促進焦点の人は素早く課題を遂行すると示されている（Förster et al., 2003, など）ことである。

2. 方法

参加者　青森県内の短期大学生90名（女性85名，男性5名）が実験に参加した。参加者は，後述の利得接近志向から損失回避志向を引いた平均値がなるべく等しくなるように，肯定FB条件30名，改善FB条件30名，両FB条件30名に分けられた。

課題　「あなたの長所は何ですか？具体的な経験を挙げて教えてください」というテーマで文章を書く課題を実施した。

手続き　集団を対象に，2回に分けて実験を行った。1回目は，全ての参加者に同じ条件で課題を実施した。2回目は，最初に課題に対するコメントが記されたシートを渡した後に，2回目の課題を実施した。ただし，コメントの内容は条件ごとに異なっていた。すなわち，肯定FB条件の参加者のシートには，作文の「良かったところ」が2点記されていた。改善FB条件の参加者のシートには，作文の「直した方がよいところ」が2点記されていた。両FB条件の参加者のシートには，上記の2種類のコメントが，それぞれ1点ずつ記されていた。

制御焦点適性　尾崎・唐沢（2011）のPPFS邦訳版を使用した。下位尺度は，(1) 利得接近志向：肯定的な結果や進歩などへの関心，(2) 損失回避志向：否定的な結果や後退などへの関心，である。

作文の改善　作文の改善過程を検討するために測定した。主な変数は，(1) 興味・楽しさ：作文中に感じた興味や楽しさ，(2) 不安：作文中に感じた不安，(3) 直感的方略：自由に直感的に文章を書く方略，(4) 熟慮的方略：じっくり考えながら文章を書く方略，(5) 改善意図：FBを受けて作文を改善しようとする意図，(6) 修正：文章を修正した回数，(7) 文字数，(8) 総合評価：作文の総合的な質の高さ，である。(1)～(5) は質問紙による自己報告，(8) は大学院生2名による評定である。また，(5) は2回目の課題についてのみ，その他は1回目と2回目の両方の課題について測定した。

作文への動機づけ　主に条件間の差を統制する目的で，質問紙により測定した。下位尺度は，(1) 作文への好感・自信，(2) 作文の上達意欲，である。

3. 結果と考察

FB条件と制御焦点適性の主効果，およびそれらの交互作用を検討するために，2回目の作文の改善に関する各変数を従属変数とした階層的重回帰分析を行った。独立変数は，第1ステップを共変量，第2ステップをFB条件，第3ステップを制御焦点適性，第4ステップをFB条件と制御焦点適性の交互作用

とした。共変量は，作文への動機づけ，従属変数に対応する1回目の作文の改善に関する変数[1]，および検討対象以外の制御焦点適性[2]である。

分析の結果，主効果については，(1) 改善FB条件が両FB条件よりも不安が高いこと（$F(2, 83)=2.73$, $p<.10$），(2) 改善FB条件・両FB条件が肯定FB条件よりも熟慮的方略が高いこと（$F(2, 83)=4.23$, $p<.05$），(3) 両FB条件が肯定FB条件よりも改善意図が高いこと（$F(2, 84=3.40$, $p<.05$），(4) 改善FB条件・両FB条件が肯定FB条件よりも修正が高いこと（$F(2, 83=4.92$, $p<.01$），が示された。このうち，(2)，(3)，(4) の結果は，仮説1を支持するものである。すなわち，両FBのうち改善を促す部分が，熟慮的方略や修正といったメタ認知的活動を生起させる一方で，ポジティブな側面を指摘する部分が，有能感の充足を通して改善する意図を生じさせたと解釈できる。また，(1) の結果については，ポジティブな側面の指摘によって有能感が満たされると，ネガティブな側面の指摘が，失敗や不達成を伝えるものではなく，目標を達成するための情報と解釈されるため，不安が低下したのだと考えられる。

一方，交互作用に関しては，(4) 不安，熟慮的方略，改善意図に対して，損失回避志向とFB条件の交互作用がみられ（$F(2, 80)=2.61$, $p<.10$; $F(2, 80)=7.76$, $p<.01$; $F(2, 81)=2.56$, $p<.10$），3変数とも，損失回避志向が高いほど，両FB条件で値が高くなるパターンを示した（Figure 1）。また，(5) 文字数と総合評価に対して，利得接近志向とFB条件の交互作用がみられ（$F(2, 80)=7.29$, $p<.01$; $F(2, 80)=2.67$, $p<.10$），2変数とも，利得接近志向が高いほど，両FB条件で値が高くなるパターンを示した（Figure 2）。このうち (4) の結果は，仮説2の予防焦点適性の部分を支持するものである。すなわち，予防焦点の人は誤りの防止に注意が向いているため，ポジティブな側面の指摘を達成の情報として認知する。したがって，有能感の充足の効果が大きく，それが改善意図の高さに結びついたと考えられる。また，熟慮的方略が高いことは，予防焦点が慎重な課題の遂行と関連するという先行研究の結果と合致する。最後に，不安の高さは，不安が熟慮的な方略を促進する（Zeidner, 1998）ためだと考えられる。他方で，(5) の結果は，仮説2の促進焦点適性の部分を一部支持するに留まった。すなわち，促進焦点の人は，目標への進歩に注意が向いているため，両FBのうちのネガティブな側面の指摘を忠実に内容に反映させる。したがって，文字数が多く，総合評価も高くなった可能性がある。ただし，利得接近志向と直感的方略には関連が見られなかったため，方略の特定は今後の課題である。

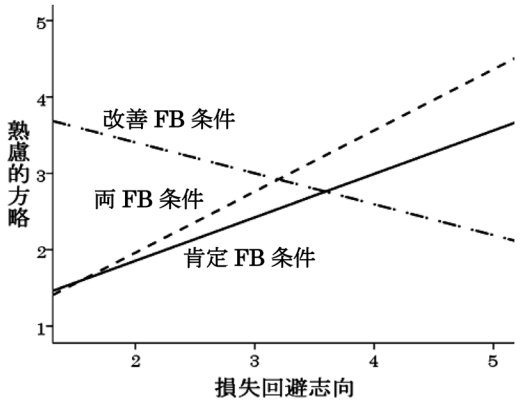

Figure 1　熟慮的方略に対する交互作用

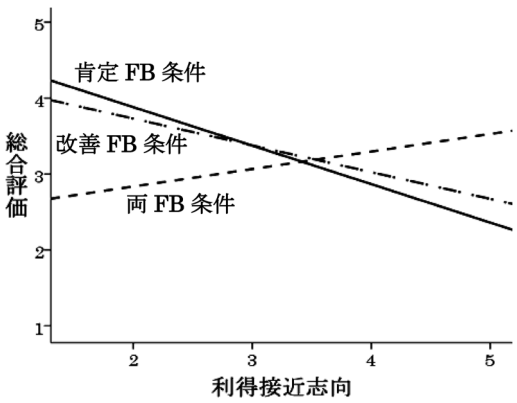

Figure 2　総合評価に対する交互作用

注

[1] 例えば，2回目の課題の熟慮的方略を従属変数とした場合は，1回目の課題の熟慮的方略を共変量とした。

[2] 例えば，利得接近志向を検討対象として第3ステップに含めた場合は，損失回避志向を共変量とした。

引用文献

Deci, E. L. (1980). *The psychology of self-determination*. Lexington, MA: Lexington Books.

Förster, J., Higgins, E. T. & Bianco, A. T. (2003). Speed/accuracy decisions in task performance: Built-in tradeoff or separate strategic concerns? *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, *90*, 148–164.

Hattie, J., & Timperley, H. (2007). The power of feedback. *Review of Educational Research*, *77*, 81–112.

Higgins, E. T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, *52*, 1280–1300.

名取洋典 (2007)。指導者のことばがけが少年サッカー競技者の「やる気」におよぼす影響　教育心理学研究，*55*, 244–254.

尾崎由佳・唐沢かおり (2011). 自己に対する評価と接近回避志向の関係性―制御焦点理論に基づく検討　心理学研究，*82*, 450–458.

Zeidner, M. (1998). *Test anxiety: The state of art*. New York: Plenum Press.